

# 窓報 同窓会

鯉淵学園同窓会

第94号

思い出の学園銀杏並木  
(平成の内原十景)

## 同窓会長あいさつ



西村 勝夫 (22期卒)

### 会長としての重圧と責任

令和元年11月の「第34回同窓会大会」において選任された山形県出身第22期卒の西村です。

当学園の卒業生は七、七九八名、全国各地に及び、農村と農業の民主化や近代化を旗印に、地域に根ざした指導的・リーダー的な立場で活躍をしてきました。この歴史と伝統のある同窓会をどのようにに継続・発展させていくかを考えると大きな重圧と責任を痛感しております。

### 学園再建20年、同窓会財政悪化

ご承知のとおり、この20年間は学園の存続、再建活動が同窓会活動の重要かつ中心活動で、会員の皆さんに再三にわたり寄付や基金にご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

その結果、会員の皆さんも学園の再建には多大の力をいただきましたが、一方同窓会への会費、寄付は年々減少し、会費納入率は20%を切る状況となり、現行事務局の運営も大変厳しい状況にあります。

新生学園支援事業を展開し、同窓会の皆さんにお願いしたいところですが、先ずは同窓会の財政の改善に力をお願いいたします。

### 官制から民間活力の運営へ

学園の執行体制は長年農水省やJ A全中からの派遣等で行ってきました。

ご承知のとおり、昨年からイセ食品(株)を中心とした民間活力中心の運営に大きく変わってきました。

それにともない国際農業コースの新設や科の名称の変更など学則の改正も行われてきました。

民間活力の運営は、スピード感があり、優れている面も多くありますが、トップの考え方によって理事会や同窓会と違った方向への動きがないとは限らないので、同窓会としてもしっかりと勉強して連携していく必要があります。

幸いにして、島崎学園長は同窓会を重視した考え方で、学園運営にあたって頂いているので、充分連携を強化していきたいです。

学園長を中心に教職員が一丸となって学園運営を行なうことが重要であります。特に常務を中心とした事務・教務が将来に向かって学園長と十分に意思疎通を図って執行・運営にあたっていか注視していきたいものです。

### 同窓会の執行運営体制強化

同窓会の役員体制は、私を含めて高齢化が進み、人数や仕組みも変わっていません。今回の大会から常任委員を増員しましたが、今後も定数にとらわれず増やしていきたいと思えます。各県の支部体制についても次の時代につなぐため、若い人を登用していきたいものです。

支部を含めて同窓会活動を活性化するためにはなんとしても予算が必要です。そのためにも永年会費、年会費の納入を再度お願い申し上げます。

## 新しくスタートした 鯉淵学園の一年



鯉淵学園農業栄養専門学校  
学園長 島崎弘幸

の周りに二万本のひまわりの花を咲かせました。文字通り、歓迎の花道で、オープンキャンパスに参加する高校生を迎えました。また、高校生だけでなく、同伴のご両親も一緒に楽しめるような、やさしい講演会を開催しました。丁寧な学校案内、説明会を開催しました。今年はコロナ禍で、難しい面もありましたが、密にならないような工夫をしながらの開催でした。

昨年、古木となっていた正門近くの桜を若い木に植え替えました。皆様にとって学生時代を彩る桜ですが、時代は移り、どの木も幹の中心が30センチほどの大きな空洞になって、強風で倒れるおそれもある危険な状態でした。新しい学園の象徴として、新しい桜の木を植えたのですが、この春は数えるほどしか花をつけませんでした。美しい花を咲かせるには、根を張り、枝をのびし、幹に十分な力をためる時間が必要だと思います。新生／鯉淵学園も、今は、そんな日々です。花は必ず咲きます。来春に向けて、新入生の獲得に教職員一同、全力を挙げて取り組んでいます。

鯉淵学園は、この一年、イセ食品(株)の支援の下に、雨漏りがしていた体育館を全面的に改修しました。桜の木を植え替え、ツツジの垣根を作り、高校生の学校訪問(オープンキャンパス)にあわせて、八月には学園

学園のホームページは制作業者を含めて一新しました。教員組織も、魅力的な布陣に改善し、農業技術センターも新しく組織しました。先生方の実力を評価して、責任のある役割をお願いすることにより、鯉淵学園自体が活性化され、元氣と活力にあふれています。事務職員を含め、先生方には、笑顔で学生に対応できるようにお願いし、学生目線でお世話をして頂けるようになりました。この学校にとって、今一番必要なことは、学生数の増加です。種々の新しい取り組みをしながら、教職員一同、頑張っています。

同窓生の皆様にも、引き続き、ご支援とご協力をお願い申し上げます。



全面改修した体育館

## 専門職大学移行構想の 実現に向けて



鯉淵学園農業栄養専門学校  
副学園長 長谷川量平

はじめに

前号の学園同窓会報第93号でも掲載してありますように「次の70年に向けた取り組み」を種々行っております。今年度には、高等教育無償化の認定校となり、現在は企業と協働した教育を行っている証である職業実践専門課程への挑戦を行っています。両者ともに昨年度からの取り組みの果実として、本年度認定される見込みです。今般、同窓会員の皆様には、中期的な挑戦として、鯉淵学園の専門職大学化についてお伝えしたいと思います。

専門職大学とは

2017年5月24日の学校教育法の改正に伴い設けられたもので、既存の大学と同じ4年制(短期大学は2年制ないし3年生)ですが、特徴として、実践・実習を重視し、社会に出て即戦力となる人材を育成すべく、カリキュラムの3/4程度は実習と定められています。教員は、博士の学位を持つ研究職員以外に、社会に出て実

際に活躍した実務家教員が4割程度在籍することが求められます。

75年の実践教育を行っていた鯉淵学園の学風を追随するかのような設置方針であり、今後の鯉淵学園の中期的な目標だと思います。

しかしながら、種々クリアしなければならぬものがあり、その概略を整理するとともに、同窓会員の力をお願いしたいと思います。

専門職大学化までの道のり

私立の専門職大学を設置するためには、キャンパス、教員組織、法人、財務状況、学生募集の見込みが大きな問題となります。鯉淵学園はもともと、50haの校地を持ち、大学にも負けないほどの教員組織を持っています。しかしながら現在は公益財団法人を母体とした専修学校であり、このままでは専門職大学となることはできません。そのため、来年3月の学校法人設立申請を目指し、種々調整しているところです。

財務状況、学生募集の見込みに関しては、本年度の募集状況が大きく左右します。学生の集まらない学校が大学を作ろうとしても失笑されるだけであり、本年度募集目標の90名以上を何としても達成し、健全な財務状況を見込める事業計画を作り上げようと思います。

学生の定員、学部学科の構成など検討すべき点、クリアすべき点は相当ありますが、必ず実現する意欲をもって取り組んでいきたいと思っております。ご協力をお願いいたします。

地域の食生活を支える  
栄養士を育てて50年



食品栄養科 副学科長 教授  
**浅津 竜子**  
(管理栄養士 47期卒)  
(右) 客員教授  
入江三弥子 (29期卒)

本校の栄養士養成は今年で50周年を迎えました。記念の企画を検討し、コロナ禍の中でできることとしてリーフレットを作成し、地域の皆様へのお披露目と本校に入学を検討いただいている方々へのご案内をしています。

また、コットンバックを作成し、在校生と学園の見学者へ配布しています。これらのイラストデザインは、食品栄養科助手の宇佐美晶子(68期卒)が担当しました。

皆様方の過ごされた時代の学園はどのような様子でしたでしょうか。



オリジナル  
コットンバック

か？私は入学時から数えて30年、学園とお付き合いをしています。三年制から四年制、そして二年制に変更する裏側で、学生食堂での食事提供や学生生活を支えつつ、全寮制から希望寮制、学生食堂の学生自治会から学園への移管とその都度学校と自治会の制度やルールの見直しに関わり、今を迎えています。

栄養士養成としては「給食の運営」分野と就職指導を担当しています。現在の栄養士養成課程は、栄養士としての就職率が高く(90%以上)、社会人経験のある学生や男子学生も多数(それぞれクラスの1/2割)在学しています。

栄養士の資格を取得して社会に貢献する・家庭にも活かす！という意欲の高い学生が多いのが現在の食品栄養科の特徴で、私も毎年入学してくる学生との出会いを楽しみつつ、励んでいるところです。

自身の30年は、たくさんのお職員や学生との思い出があります。今回は客員教授の入江先生とのツーショット写真をご披露させていただきます。卒業生の皆様には、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

新しい鯉淵学園農業栄養専門学校の主な教員紹介

教授	島崎 弘幸	学園長・理学博士
教授	長谷川 量平	副学園長・博士(農学) フードシステム

客員教授	入江 三弥子	茨城県栄養士会会長 管理栄養士
客員教授	薄井 寛	国際ジャーナリスト/国際農業論

アグリビジネス科

教授	大熊 哲仁	科長 園芸・野菜栽培
教授	前嶋 智	副学科長・修士(農学) 防疫・作物保護
教授	佐久間 文雄	博士(農学) / 果樹栽培
教授	小島 敏之	獣医学博士 畜産・繁殖生理
教授	高田 良三	博士(農学) / 畜産・養鶏
准教授	井上 洋一	博士(農業経済学) 農業協同組合論
准教授	磯野 卓司	家畜・生産加工
准教授	児島 記代	博士(政策)・税理士 簿記会計論
講師	塩野 紘	修士(畜産) / 家畜衛生
講師	平澤 朋美	有機農業
講師	ジャンルー・カムカムジョン	国際コース担当/修士(日本語教育) 日本語・日本文化
講師	佐藤 スワパット	国際コース担当 日本語・日本文化
講師	青木 淳	農産物加工・保健体育

食品栄養科

教授	野口 貴彦	科長・博士(農学) 生化学研究室
教授	浅津 竜子	副学科長・管理栄養士 給食管理研究室
教授	小林 秀行	博士(農学) / 食品科学研究室
准教授	若林 陽子	管理栄養士 / 栄養学(第一) 研究室
講師	勝山 由美	管理栄養士 / 栄養指導研究室
講師	長谷川 陽子	管理栄養士 / 栄養学(第二) 研究室
助手	高崎 瑞穂	管理栄養士
助手	新井 波音	管理栄養士
助手	宇佐美 晶子	栄養士

農業技術センター

准教授	秋葉 勝矢	センター長 / 農業機械
講師	鈴木 一広	副センター長 / 農業技術
講師	田口 房男	農業実習
講師	田山 和実	生産加工販売実習
助手	高瀬 努夢	生産加工販売実習
助手	篠原 由美	生産加工販売実習

# 地域を拓く鯉学卒業生の活躍紹介

## 管理栄養士に挑戦

令和元年度食品栄養科卒業の（長野県篠ノ井高等学校出身）田中智さんは、卒業時に東畑賞を受賞しました。また、昨年12月に行われた第16回栄養士実力認定試験では、全国受験者9,180名中、44位となり、「成績優良表彰」を受賞しました。

卒業後は、JA長野厚生連佐久総合病院に就職しました。この病院には平成11年度卒業生（53期卒）の田野健明さんも管理栄養士として勤務しています。田中さんも日々の栄養士業務をしながら、管理栄養士国家試験合格を目指しています。本校卒業生達の今後の活躍に期待しています。

（文責・食品栄養科教授 浅津電子）



長野県佐久市 田中 智 (73期卒)

## 知的財産活用による選果機事業の推進



茨城県筑西市 日本協同企画株式会社 代表取締役社長 宮田和男 (23期卒)

学園卒業後、就農しましたが、24歳の時、協同組合塾（現存）を設立し、地域農協の合併と同時に35歳で理事に就き、現職（JA北つくば）の理事として農協経営に参画しております。

その活動の実践中、キュウリ生産者が半年間も毎晩箱詰の過労に耐えている姿を見て、生産者に歓迎されるキュウリ選果機の開発を決定しました。

当時、大手農業機械メーカー数社に依頼しましたがすべて断られ、日本を代表する大手家電メーカー数社に依頼したところ、各メーカーが数億円も投資して、6年間も開発に尽力を頂きましたが、全て失敗し撤退しました。

もはや農業の現場にいる己がやるしかない！と決意し、初めてパソコンを購入し、図面制作のCADを独学で学び、選果機の仕用図面を完成させました。周囲の猛反対の中、自宅を担保に借金し、町工場の社長と2人で約1年間かかりましたが、遂に開発に成功しました。この事をきっかけに、北海道（ミニトマト）から沖縄（マンゴー）までの全国のJAから新規開発の要請が相次ぎ、果菜（日本を代表するトマト、キュウリ、ナス、ピーマン：産地）、果実（桃、梨、メロン、スイカ：産地）の殆どの選果機を考案開発し、その全てを成功させました。その開発の噂が口コミで拡大し、更新や新規導入では従来メーカーの選果機は殆ど姿を消し、弊社製「イタマーズ選果機」が全国の殆どの産地に急速普及したことで、日本の園芸生産者の過労の解消やコストダウンと品質維持を実現できたと思っております。

真に求められる機能「シンプルイズベスト」をモットー

### イタマーズ選果機の特徴

「くだものやさしく、それがイタマーズです。」

- 選果機業界で初めて「やさしく」を実現しました。
- 選果機業界で初めて「やさしく」を実現しました。
- 選果機業界で初めて「やさしく」を実現しました。
- 選果機業界で初めて「やさしく」を実現しました。
- 選果機業界で初めて「やさしく」を実現しました。




イタマーズ選果機の特徴

## 関越道赤城高原 SAで農産物販売



群馬県利根郡昭和村 保坂洋子 (25期卒)

赤城山の麓、野菜王国昭和村の畑の南端を関越道が走っています。そ



ファーマーズマーケット

平成14年SA内売店で苺の販売に声がかかり、直売コーナーでの販売が始まりました。それまでは近くに大きな消費地（SA）があったことに気が付きませんでした。苺を提供し続けた努力が認められ、平成20年、関越道では2番目となる野菜市場がオープンしました。野菜の品揃い、納品等すべてが一任され、仲間を集めて組織を作り、地元野菜の販売を行っています。一般的な生鮮野菜販売とは売り方の環境条件が異なりますが、生産者自らの自信の商品に適正価格を付けて販売するという高付加価値農業を目指して事業を展開した結果、上り線の業績が認められ、下り線にも売り場が設置されました。今では高速道SAの野菜市場は一般の直売所とは違い、広い地域のお客様に教えられ、通過点でありながら交流の場になっています。

平成30年にはファミリーマーズ・マーケットと名前を変えて売上げも伸び、売り場面積も大きく拡がりました。

SAでの活動が認められ、農水省の平成29年度農山漁村女性活躍表彰「女性起業新規事業開拓部門」で優良賞をいただくことが出来、励みになっています。

これからも赤城高原の特徴を生かした農産物を販売しながら、地元産を使った野菜、果実のジュース、ソフトクリーム、レストランへの野菜の提供も続けていきます。仲間と供に楽しい旅の思い出が増えることを願いながら頑張ります。

地震を乗り越え、北の大地の大型農業に挑む



北海道勇払郡厚真町 窪田泰法 (46期卒)

私は、2年前に胆振東部地震で震度7を観測した厚真町出身です。被災当時においては全国の皆様からいろいろと支援をして頂き誠に有難うございました。

私の経営は、水稲を中心に秋小麦・大豆、緑肥作物といった輪作体系を組んで、20・4ha作付けしており、水稲は「ゆめぴりか」と「ななつぼし」の2品種を合わせて14・8ha、秋小麦1・7ha、大豆1・5ha、緑肥2・4haを妻と父と3人で営んでいます。2年前、私も経験したことがない地

震が発生し、発生当日から地元の消防団に所属していたため、町内の被害状況調査や行方不明者の捜索に1週間出勤していたため、自分の農地、農業用機械や施設の被害状況を確認することが出来たのはその後になりました。

町内の被害状況は土砂崩れにより、建物が崩壊し、農地に土砂混入、地割れ、起伏により、収穫寸前の作物の収穫が出来ない状況になってしまいました。

幸いにも自分の農地は、土砂混入、地割れ、起伏等の被害、農業用機械や乾燥機には被害が無く、無事、作物の収穫が出来たのでホッとほしましたが、自宅は全壊し、作業場の一部が前日の台風21号により破損して、水稲の苗箱が崩れてしまいました。消防団の出動1週間後から苗箱の片付けをし、稲刈り後は台風で破損した作業場を父と2人で修繕しました。

自宅に関しては、当初、両親とは別々に住んでいたのですが、両親だけ仮設住宅に暮らしていましたが、昨年9月に新居を建てて、今は両親と一緒に住んでいます。

震災から2年が経ち、町も復旧作業が進み、少しづつではありますが、元の姿に戻ってきています。被害があった農地も復元され、年々、作付けできる面積が増えてきていますが、未だ復元中の農地、土砂の堆積場や砂防ダム建設によって農地が無くなっているのが現状です。

自分の田んぼも年々地震の影響で水落し口周辺の畦に穴があき、水が流水したり、水落し口の暗渠パイプの根元が切れているといった状況が増えており、修繕しながら頑張っています。

厚真町の農業人口も高齢者が多く、後継者も1ターンのUターンで戻っ

てきている農家もありますが、とくに震災後は亡くなった方の農地や、高齢で離農された農地が増え、個々の経営面積が増えているのが現状です。私の住んでいる集落も後継者のいない方が多いため、経営面積も増えています。

家族経営のため、人手不足もあり、規模拡大にも限界がありますが、周囲の農地を守っていくためにも不足部分を補うため、今後、自動操作のトラクター・田植機・コンバインでの作業やドローンを活用した防除体制、また、水稲の直播栽培や密苗等といった栽培技術などを導入していく必要があります。これらのことを計画的に実施することで、規模拡大が可能になっていくと思います。

最後に卒業生、現役の皆さん、一度厚真町に来て、被災地の現状と自分が頑張っている姿を見てもらいたいです。農業情勢も厳しい部分がありますが、消費者の皆さんにいつまでも美味しい作物を提供できるように自分も頑張っていきたいと思っています。



都内で体験農園に特化した経営展開



東京都練馬区 富岡忠明 (44期卒)

学園卒業後すぐに就農し、市場出荷中心のキャベツ生産や、JA直売所でアスパラガス等の販売を行っていましたが、キャベツの市場価格の低下や出荷時の人出不足等の問題が出てきました。

限られた農地を有効に利用し、安定した収入を得るためにはどうすればいいかを考える中、先輩農家が、農業体験農園を運営していました。農業体験農園は「初心者でも高品質の野菜を収穫できる」がコンセプトで、年間30品目位の栽培を行います。

農家が作付計画、講習日程を決め、種子や肥料、農機具を用意し、利用者は手ぶらで来られる農園です。区画は1区画・30平方メートルで、年間利用料は5万円です。

区画利用料金が毎年安定して得られることで経営が安定しましたが、講習会での苦労もありました。普段行っている作業について、資料を用意し、講習をするのですが、伝え方によって利用者の理解が変わり、毎回反省させられました。

農園を初めて12年、現在82区画での経営ですが、今年のコロナ禍の中で、生活様式が見直される中、農園を利用



## 宮古で耕す男女参画



沖縄県宮古島市  
宮古工ミ (20期卒)

したいと多くのお話を受け、来年度増設に向けて調整中です。現在は体験農園での経験を生かし、落花生や玉葱の収穫体験や近隣小・中学校生の農業体験を受け入れています。農業経験がほとんどない子供達や多くの区民と触れ合う中で、自給率や都市部の生産緑地などの問題をお話しして、一人でも多くの皆様に農業を身近に感じてもらうように、今後も活動を行いたいと思っています。

平成11年「男女共同参画基本法」が制定されたのに伴い、普及活動の一環として、まずは農業経営における女性の役割を適正に評価する「家族経営協定の締結」を推進しました。男女平等とは名ばかりの地域で夫と妻が我が家の経営収支状況を把握し、妻の給料制、農休日の設定、家事分担等を何度も話し合い、キッチンと役割分担することにより、お互いを尊重しあう習慣が生まれた結果、女性が社会進出しやすい環境づくりにおいに役立

ちました。

平成12年沖縄本島の中普及センターに勤務していたとき、農業振興地域である宮古地区だけに女性の農業委員がないと指摘されました。

平成14年、宮古に転勤後、早速組織目標として「女性自身の意識向上と地域の方針決定の場への参画促進」を掲げて農漁村地域で活動している生活研究会、JA女性部、たばこ耕作組合女性部、和牛改良女性部、漁協女性部の5組織で結成されていた「宮古地区農漁村女性組織連絡協議会」と一丸となり、当時は5市町村長並びに議会議長へ女性登用の要請活動を再三行いました。

その成果が現れ、ゼロから一気に7名の女性農業委員が誕生しました。当時「宮古の農漁村に新しい風が吹いた！」と大々的に報道され、皆で喜び合ったことが鮮明に残っています。

しかし、宮古島の農業委員は現在17名で、内女性は1名のみとなっています。生産活動の現場にいる50%以上が女性です。家族や地域が活性化するためには、女性が先導的役割を果たし、本当の意味での女性が輝く男女共同参画社会になつて欲しいと願っています。

今、新型コロナウイルス感染症の終息が見えないだけでなく、台風、水害、地震等の自然災害の影響を受け、特に家族経営で命を守る農林水産業は時代にあつた仕事のやり方や工夫で「ピンチをチャンス」に「流れに棹さす人となれ」でアイデアを出し合い、「今日も笑顔で！」乗り切つて欲しいと願っています。



## 高年齢者叙勲 双光章受章者 (地方自治功労)



宮城県遠田郡美里町  
本間省吾  
(通信教育第1期卒)

## 令和元年6月1日付で受章

昭和25年に宮城県職員となり、宮城県小牛田農業事務所勤務、平成2年3月技術参事兼農産課長で退職しました。県職員在籍39年、内28年間農業改良普及員として勤務。6年間を普及主務課で農業経営係として勤務したので、県職員としての大半を農業改良普及活動に努めたこととなります。

昭和37年鯉洲学園通信教育第1期生として受講しました。農業経済に強く関心を持たされ、続いて行われた大学留學研修で農業経済を選ばせて頂きました。農業経済を学んだことは仕事は勿論私の人生にとつても、視野を広げさせて頂きました。唯々感謝するのみです。

## 高年齢者叙勲 双光章受章者



愛知県名古屋市長  
奥田勝己  
(7期卒)

## 令和2年2月1日付で受章

昭和27年3月に愛知県採用職員研修会から始まり、平成2年3月まで39年間の内、20年が農業改良普及所勤務で、園芸と青少年育成に係わり、農業技術課、宮農大に19年間勤務し、愛知用水、豊川用水の営農指導と青少年育成に係わってきました。学園では、全寮制により、幅広い人間関係の繋がりが出来、指導では技術の切り売りでなく、雨水が大地にゆつくり浸透するように人に接する事を学び、現地で実践してまいりました。今後はこの栄誉を励みとして、健康に留意して一日一日を大切に過ごして行きたいと思っています。



奥田勝己受章

書籍発行のご紹介

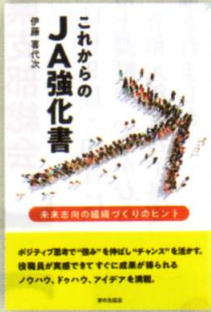
J A への実践的な提案の書  
『これからの J A 強化書』  
『未来志向の組織づくりのヒント』



東京都八王子市  
A・ライフ・デザイン  
研究所・代表  
伊藤喜代次  
(26期卒)

全国の J A に即戦力となる人材を送り込んできた協同組合学科が、鯉淵学園から中央協同組合学園に移管されたのは 1970 年、ちょうど 50 年前。当時の鞍田純学園長、宮島三男教授には、その後も長くお付き合いいただいた。お二人の農業協同組合への熱く強い思いと、真摯に学究に向き合う姿勢を学ばせていただいたし、頭の片隅から離れたことはない。

この半世紀、J A は合併によって組織が拡大、事業量も飛躍的に増大した。だが、地域の農業や農業経営者の組織としての使命をどう果たすべきか。旧態依然の事業推進の転換、職員教育や資質向上策、経営の健全性の確保、時代・変化への適応など、すぐに実行すべき施策と術は数多い。どう判断し、実践するか。40 年間、民間企業や行政機関などの調査・コンサルティングを通じて、即実践活用できるビジネスノウハウと全国の事例を紹介し、J A の事業・経営の強化策を提言した。



2019 年、家の光協会・刊

第34回 鯉淵学園同窓会大会結果報告

令和元年11月30日、J R 東京駅八重洲口 T K R セントラルカンファレンスセンターにおいて開催されました。当日は、農民教育協会の、海老澤常務理事兼事務局長、島崎学園長、長谷川副学園長の出席を頂き、各県の支部からは、北海道、岩手、宮城、新潟、福井、岡山、徳島、高知、宮崎、沖縄から支部長並びに支部長代理が出席しました。本部役員、代議員を含め、31名の出席となりました。



第3号議案  
令和2年度～令和3年度役員選任  
3年度の役員選任について  
選任された次期  
新役員は次の通りです。

大会の総会前に島崎学園長から「鯉淵学園の現状と近未来への展望 新しい学校運営の取り組み」と題して記念講演を頂きました。

74年の伝統ある鯉淵学園を新しい学園に生まれ変わらせるための運営方針について、直に拝聴できる絶好の機会となり、改めて学園教育の最高責任者としての力強い意気込みを理解することができました。

総会は、沖縄県支部長の前田実氏(30期卒)の議長進行のもとに、提案された全議案は原案通り可決承認されました。

〔提案議案〕

第1号議案  
平成30年度～令和元年度事業報告並びに収支決算について

第2号議案  
令和2年度～令和3年度事業計画並びに収支予算(案)について

会 長	西村 勝夫 (茨城県22期卒)
副会長	黒澤 賢治 (群馬県25期卒)
常任委員	若林 英一 (栃木県25期卒)
	倉辻 芳次 (茨城県19期卒)
	卜部 泰郎 (千葉県19期卒)
	志村 隆 (神奈川県23期卒)
	新関八千代 (静岡県23期卒)
	牛山 喜文 (長野県23期卒)
	五十嵐竹男 (福島県23期卒)
	江幡ゆき子 (茨城県23期卒)
	清川 完司 (埼玉県24期卒)
	柴崎 正治 (茨城県26期卒)
	石塚 仁 (茨城県33期卒)
	池崎 誠二 (栃木県34期卒)
	富岡 忠明 (東京都44期卒)
	秋葉 勝矢 (学園46期卒)
	浅津 竜子 (学園47期卒)
	高橋 美保 (学園55期卒)
監 事	野澤 ゆう (東京都56期卒)
	平沼 常雄 (茨城県26期卒)
	大橋 晃市 (茨城県32期卒)
顧問	島崎 弘幸 (学園長)
	九石 裕 (栃木県23期卒)
公益財団法人農民教育協会	
同窓会代表理事	黒澤 賢治 (群馬県25期卒)
同窓会代表評議員	若林 英一 (栃木県25期卒)

北海道	中井 弘 (23期卒)
青森県	藤村 義美 (28期卒)
岩手県	千田 由春 (25期卒)
宮城県	山家 賢藏 (24期卒)
秋田県	山本 平男 (24期卒)
山形県	長橋 雅司 (28期卒)
福島県	五十嵐竹男 (23期卒)
茨城県	倉辻 芳次 (19期卒)
栃木県	池崎 誠二 (34期卒)
群馬県	黒澤 賢治 (25期卒)
埼玉県	清川 完司 (24期卒)
千葉県	卜部 泰郎 (19期卒)
東京都	野澤 ゆう (56期卒)
神奈川県	志村 隆 (23期卒)
新潟県	深山 徳夫 (23期卒)
富山県	重野 一雄 (16期卒)
石川県	宮崎 章 (25期卒)
福井県	安夫 正嗣 (24期卒)
山梨県	
長野県	
岐阜県	熊谷 悦近 (19期卒)
静岡県	新関八千代 (23期卒)
愛知県	久胡 信隆 (21期卒)
三重県	北川 勝己 (23期卒)
滋賀県	
京都府	奈良井 真 (23期卒)
大阪府	成田 正幸 (17期卒)
兵庫県	福井 寛行 (26期卒)
奈良県	武田れい子 (24期卒)
和歌山県	松浦 義人 (23期卒)
鳥取県	佐藤徳太郎 (20期卒)
島根県	仙石 晃 (23期卒)
岡山県	平田 精一 (24期卒)
広島県	桑原 謹二 (12期卒)
山口県	田中 耕二 (25期卒)
徳島県	逢坂 新治 (23期卒)
香川県	川崎 武司 (19期卒)
愛媛県	大塚 俊秋 (25期卒)
高知県	山下 秀雄 (23期卒)
福岡県	高知 守人 (26期卒)
佐賀県	近藤 弘道 (23期卒)
長崎県	尾崎 原喜 (27期卒)
熊本県	井 晴生 (26期卒)
大分県	甲斐 文義 (26期卒)
宮崎県	長友 文彦 (29期卒)
鹿児島県	溝口 道寛 (19期卒)
沖縄県	前田 実 (30期卒)

# 同窓会県支部・ブロックの活動紹介

## 岩手県支部総会

令和元年11月9日・10日に、岩手県遠野市土淵町の「たかむら水光園」で、令和元年度岩手県支部総会が開催されました。

支部会員14名のほかに、宮城県から1名の参加がありました。

第1号議案から第3号議案まで、原案通り承認され、次回は北上地区で開催することに決定しました。

総会終了後、同窓会事務局の江幡局長から、学園の新体制、学生の入学状況、同窓会の現状等の報告があり、学生募集や同窓会への会費・寄付金等の協力依頼がありました。

岩手県支部は、毎年総会を開催し、地区ごとの運営もうまく機能していますが、参加者が卒期10期代から20期代で、若い会員の参加が少ないことが課題となっています。  
(文責・同窓会事務局 江幡ゆき子)



## 四国地区同窓会



四国地区同窓会は、隔年で四国4県持ち回りで開催されており、今回は令和元年11月16日・17日にかけて、徳島市内のホテルで開催されました。

今回は、4月からの学園新体制のもと、国際農業コースの開講などの改革があり、関心が高まりました。

参加者は各県支部の支部長等役員が中心でしたが、情報交換と懇親を深めました。

(文責・同窓会 九石 裕)

## 北海道支部総会

令和元年11月23日・24日に、札幌市内ホテルにて、北海道支部総会が3年ぶりに開催され、支部会員22名の参加がありました。

近年、北海道においても自然災害に襲われることが例外ではなくなりました。特に、昨年9月には胆振東部地震が発生し、当日出席会員の中にも家屋の半壊・全壊の大きな被害を受けた方がおられました。

道内で活躍する会員は、農業経営者・JA職員・普及センター職員・試験研究者など多様です。当日は若い会員も多く参加し、なごやかにまた活気に満ちた総会でした。

(文責・同窓会 九石 裕)

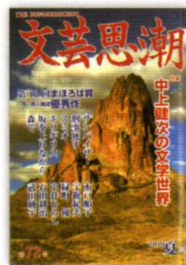


## 全国同人雑誌最優秀賞

「まほろば賞」を受賞して



北海道勇払郡むかわ町  
中井 弘  
(23期卒)



アジア文化社文芸思潮

皆さんお元気ですか。昨年9月13日東京での授賞式後、新潟開催の23期同期会で大変お世話になり、賞を祝っていただきました。第13回全国同人雑誌最優秀賞受賞作「キリギリス」は2000作品の中から優秀賞に選ばれ、審査員5名初の満票でまほろば賞を受賞。私にとって奇跡の2019年となりました。作品は全盲になった主人公キヨが幾多の試練の末に、私の故郷美瑛で最期を迎えようとしています。それでも尚一縷の望みを抱き生きています。それは亡くなった息子の声にそっくりな少年に再び会いたいとの願いです。震災、自然災害、新型コロナウイルスと経験したことのない閉塞感があり、不自由です。多くの方に作品を読んでいただき、キヨは逆境の中で何度も死のうとし生きることを決意します。希望を心に必ず皆さんの願いも叶うことを祈っています。

作品はアジア文化社文芸思潮出版部(電031570617847)か、中井弘(0901837317537)に。



